

# 日本宗教学会 第76回学術大会

## パネル発表要旨集

日時 2017年9月15日(金)－17日(日) パネル発表は16日午後・17日午後

会場 東京大学 本郷キャンパス 法文1号館

### 開催パネル一覧

	部会	教室	パネル題目	代表者
16日午後	7	214	仏教における〈教化〉の諸相—近世から近代へ—	岩田 真美
	8	212	連合国のアジア戦後処理と宗教—史料・現地調査からの再検討—	平良 直
	13	314	聖と古代のファシズム	平藤喜久子
	14	312	宗教・障害・共同体—障害と共に生きることの宗教性—	安藤 泰至
17日午後	1	113	井筒「東洋哲学」のパースペクティヴと宗教研究	澤井 義次
	2	112	20世紀ユダヤ哲学再考—政治と宗教のはざま—	伊原木大祐
	3	219	デュルケーム宗教学思想の可能性—没後100年によせて—	山崎 亮
	4	217	日蓮遺文の編纂と刊行	三輪 是法
	5	216	公的領域の多元性を踏まえた宗教の多元性とそれぞれの社会的機能	津城 寛文
	6	215	総力戦下の宗教系大学・専門学校における「理念」の変質	江島 尚俊
	7	214	多死社会における仏教者の社会的責任	小川 有閑
	8	212	世俗のなかの「宗教改革」—日米独の Ethical Culture の役割—	栗田 英彦
	9	319	近代日韓の宗教運動の「変容」—東アジア的文脈から—	川瀬 貴也
	10	317	学校教育における伝統的な言語文化としての神話教材	大澤千恵子
	11	316	国体明徴運動下の社会と宗教—昭和10年前後を中心に—	小島 伸之
	12	315	戦後日本の宗教者平和運動研究を更新する	大谷 栄一
	13	314	関与型研究の可能性と課題	弓山 達也
	14	312	政教関係の国際比較と新しい公共宗教論をめざして	櫻井 義秀

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

## 仏教における〈教化〉の諸相—近世から近代へ—

代表者：岩田 真美

近世における東本願寺僧侶の教化活動—加賀藩領を事例に—  
明治10年代の仏教演説における教化の諸相  
明治期の妙好人伝と女性教化  
田中智学の日蓮主義運動における教化の諸相

芹口真結子(一橋大)

星野 靖二(國學院大)

岩田 真美(龍大)

ユリア・ブレニナ(同朋大)

コメンテータ：谷川 穰(京大)

司会：星野 靖二(國學院大)

本パネルでは、近世から近代への仏教における「教化」活動に着目し、その広がりと思想的変容を検討する。幕藩体制下では仏教教団が自宗の檀家以外を「教化(キョウケ)」することは基本的に許されなかったが、近世後期にはこうした状況も次第に変質していく。さらに明治維新以降、新政府が従来の身分制を廃止し、いわゆる寺檀制度の束縛も無くなったことで、「教化」なるものは新たな可能性を有するようになった。とりわけ天皇制国家の成立期において宗教による「教化(キョウカ)」は不可欠なものであったとされるが(谷川穰『明治前期の教育・教化・仏教』思文閣出版、2008年)、当該期の仏教の「教化」に注目するような研究はいまだ少ない。

一方で、近世・近代の仏教研究は、近年それぞれに大きく展開しつつあるものの、お互いに自らの時代区分のなかに留まっている嫌いがある。そこで、ここでは両時代の研究成果を総合的・連続的に捉え、近世から近代への転換期において大きく変容していく「教化」という仏教的な「実践」を通して、当該期の日本の宗教世界を描き出すことを試みたい。なお本パネルは、科学研究費助成事業基盤研究(C)「近代移行期における日本仏教と教化」(課題番号16K02190、岩田真美研究代表)の成果の中間報告として企図されたものである。

報告者たちは、宗教学、社会学、真宗学と所属する分野は多様であり、それぞれの視点から、仏教の「教化」の諸相を多角的に考察する。コメンテータには、当該分野の研究において第一人者である京都大学の谷川穰を迎えた。各発表者の報告概要は、以下の通りである。

芹口真結子：近世僧侶の教化をめぐるは一定度の研究蓄積が存するが、近世仏教が形式化したという認識をベースに教化が論じられる傾向にあった。だが近年では、近世仏教認識そのものの見直しが進むと共に、近世仏教の実態解明も進展し、教団の支配系統や、幕藩領主との関係性の再検討も行われている。そこで本報告では、加

賀藩領の東本願寺寺院を対象に、僧侶の教化が領主と教団からいかに把握されたのかを分析する。加えて、教化の実態を検討し、当該期の教化の一端を示す。

星野靖二：明治10年代に行われた仏教演説に焦点を合わせ、そこにおける「教化」に考察を加える。仏教演説については、キリスト教への対抗を念頭に置いた知識人教化の試みとしての面が指摘されているが、それはあくまで大内青巒ら指導的な位置にあった者たちの企図であった。本発表では当時の報告記事や演説筆記などを見ながら、仏教演説という場とその文脈について検討する。

岩田真美：仏教の庶民教化の資料でもある妙好人伝を考察する。真宗の篤信者「妙好人」の伝記を集めた妙好人伝には教団の動向に影響を受けたと思われる部分がある。明治期の妙好人伝には、吉田松陰の母や妹も「妙好人」として収録されており、その記事は仏教婦人会の機関誌や女性向けの教化資料にも転載されていた。本報告では仏教婦人会や女子教育など女性教化との関係性に注目しながら、明治期の真宗教団と妙好人伝をめぐる「教化」の構造を検討する。

ユリア・ブレニナ：伝統的な日蓮の教えを近代的に再解釈し、独自にみみなおしたその思想体系を「日蓮主義」と命名した田中智学(1861-1939)は生涯その布教に励み、幅広い教化活動を展開した。日蓮の教義を広く社会に普及させるべく、在家仏教運動を開始した当初から、公開演説会や講演会、公園や街頭での野外布教、幻灯布教に加え、機関誌などのメディアを駆使して教化を実践した。本発表では、こうした様々な教化方法に言及しつつ、教化活動の具体的な事例として、日露戦争前夜に開催された長期講習会(本化宗学研究大会)を取り上げる。また、智学の特徴的な教化活動としては、明治後期に始まり、大正・昭和初期に展開した芸術による教化にも着目し、日蓮主義運動における教化の一端を明らかにしたい。

## 連合国のアジア戦後処理と宗教—史料・現地調査からの再検討—

代表者：平良 直

忘却された戦後宗教史—米国・沖縄の公文書史料と現地調査から— 中野 毅 (創価大)  
 占領期ソ連のシベリア抑留者教育—『日本新聞』の描く天皇像— 宮川 真一 (創価大)  
 米軍政期韓国におけるキリスト教と国家権力 白 恩正 (創価大)  
 沖縄初期占領期における USCAR とキリスト者 平良 直 (倫理研究所)  
 捕虜死者と戦後処理—豪カウラ日本人墓地をめぐる諸問題— 田村 恵子 (オーストラリア国立大)  
 司会：平良 直 (倫理研究所)

戦後 70 年以上が経過した現在でも日本を含めた東アジアをめぐる国際情勢は、第二次世界大戦後の連合国による占領と戦後処理の影響を大きく受けている。日本の宗教、宗教制度に対するその影響については、これまでも多くの研究がなされてきた。代表的なものは、阿部美哉による連合国占領軍の宗教政策の研究、ウッダードの『天皇と神道』、戦後 40 年代に行われた井門富二夫らによる総合的研究『占領と日本宗教』(1993 年)などである。しかし、それ以降にも多くの史料の発掘・整理、そして発見があり、それらを緻密に分析し、従来の戦後レジームに対する認識に新視角を与える研究も現れるようになった。これまでの研究を補完する、または修正するためにも連合国の占領政策、とくに宗教に関する戦後処理に関する新しい資料による再検討が必要となっている。また文献調査のみでなく、日本の旧植民地、旧日本軍の戦闘地域での調査においても、知られていなかった、または忘却された事件や事例についての研究も進展している。

本パネルでは米国・ソ連・オーストラリアの連合国、また沖縄、韓国など被占領地での調査結果をもとに連合国の宗教と関連した戦後処理についての、より全体的な把握を得るための場としたい。

なお本パネルは、科研費補助金「連合国のアジア戦後処理に関する宗教学的研究：海外アーカイブ調査による再検討」(研究代表：中野毅)(平成 26 年～28 年度)における共同研究の成果をもとにしている。

中野毅は、パネルでの各報告を全体的視点から把握するために、東アジア、なかんずく日本における連合国の戦後処理と宗教との関係についての先行研究を整理・俯瞰しつつ、近年新たに発掘された新資料について報告する。また沖縄本島および奄美、石垣島など南西諸島における戦争と神社、米軍占領統治と本土との相違などについて報告検討する。

宮川真一は、占領期ソ連の対日政策には戦犯としての

「天皇の処罰」、「天皇制の廃止」があったことを資料にもとづいて示し、いまだ研究が行われていない、日本人抑留者に対する重要な宣撫政策媒体であった『日本新聞』の内容分析を行い、天皇関連報道を分析することで占領期ソ連の天皇に対する政策の一端を解明する。

白恩正は、韓国の事例について報告する。韓国における 3 年間の米軍政期は韓国社会のあらゆる分野の方向と性格を決定づけた重要な時期である。それは韓国キリスト教においても同様のことがいえる。戦後、韓国キリスト教の量的拡大は国家権力との深い関わりを持つと同時に戦後の韓国社会の抱える構造的問題や矛盾を内包している側面もある。報告では韓国キリスト教の国家権力との関わりを、史資料をもとに解明することで、戦後韓国社会の構造的問題も含めて考察する。

平良直は、沖縄公文書館が収集・公開している沖縄初期占領時の資料をもとに考察する。終戦後すぐに米軍政府によって人選された沖縄諮問会(1945 年)や沖縄民政府(1946 年)のなかにはキリスト者が多く、中心的な役割を果たした。公文書では見えてこない沖縄内部における宗教的な信条をもった知識人と占領軍のチャブレン、軍属との関係、および琉球列島米国民政府との施策の関係を、フライマス・コレクション文書などをもとに検討する。

田村恵子は、カウラ墓地をめぐる戦後処理の問題について報告する。オーストラリアのカウラには太平洋戦争中に捕虜収容所が設置され、日本人捕虜約千人が収容されていた。このカウラ捕虜収容所で 1944 年 8 月に集団脱走事件が起き、約 230 人の捕虜が死亡した。事件での死者の墓が現在カウラにある。戦後日本政府の戦没者遺骨に対する基本姿勢は本国送還であったのに、なぜオーストラリアのカウラに日本人戦争墓地が造られたのか、さらにその決定と死亡者の多くが捕虜だったこととどのような関係があったのかを、史料と遺族へのインタビュー調査の報告を交えて検討する。

## 聖と古代のファシズム

代表者：平藤喜久子

歴史と神話の間で—安田鞞彦の神話絵画—

平藤喜久子 (國學院大)

日本型ファシズムと学問の系譜—宇野圓空とその時代—

鈴木 正崇 (慶大)

歴史の欠如と民族の聖化—ルーマニア知識人の課題と苦悩—

新免光比呂 (国立民博)

表象しえぬ古代の表象—ドイツ・プレファシズム期の視覚文化—

深澤 英隆 (一橋大)

コメンテータ・司会：月本 昭男 (上智大)

1920年代前半以降、ファシズム運動が席卷したヨーロッパ、日本などの国々では、国民統合のための民族の聖化や政治体制の正当化に、古代的なるもの、神話的な表象などが動員され、宗教、神話の研究も多大な影響を受けた。日本では『古事記』や『日本書紀』の神話が聖なるものとなり、天皇制を支えるものの一つに位置づけられた。他方で、植民地支配を拡大させていくなかで、他文化の宗教への関心も高まることとなった。ヨーロッパでも古代ローマ、古代ゲルマンの研究が盛んとなり、「キリスト教以前」への関心も高まった。

本パネルでは、このような状況を踏まえ、ファシズムの時代に、人々が聖なるもの、古代的なるものどう向き合っていたのか。客観性、実証性を重んじてきた学問は、ファシズムという時代潮流とどう寄り添ったのだろうか、という点について、日本とヨーロッパからさまざまな角度から分析する。

発表者とそれぞれの内容は次のとおりである。

発表者 1：平藤喜久子「歴史と神話の間で—安田鞞彦の神話絵画—」

1940年に神武天皇即位2600年を記念して、全国的な記念行事が展開した。その記念行事の一つとして安田鞞彦、横山大観、前田青邨といった著名な日本画家たちが分担をして神話を描く『肇国創業絵巻』が制作された。この絵巻の制作に当たっては、考古学の研究成果が参照され、時代考証がなされた。このうちとくに安田鞞彦が担当した天孫降臨の場面に注目する。この絵のなかの神々は、神話のなかで描かれているような異形の姿ではなく、人間らしい姿をする。神話として描かれたのではなく、歴史画として神話が描かれたのだろう。そこからファシズム期に彼が神話を描く際に直面した歴史の問題を考えてみたい。

発表者 2：鈴木正崇「日本型ファシズムと学問の系譜—宇野圓空とその時代—」

宗教民族学という分野を提唱し、東南アジアと日本の

比較研究を提唱した宇野圓空を取り上げる。宇野は宗教によって「民族」を理解しようと試みたが、1930年代から約10年間にわたる学術探究と現地調査は、結果的に植民地経営と戦争準備を介して「日本型ファシズム」に協力することになった。宇野を通して、学問の系譜がどのように日本の「南進」や「南方」政策に巻き込まれ、政府主導の軍事システムに総動員されていったかを、大陸で朝鮮を研究した赤松智城と対比しつつ検討する。

発表者 3：新免光比呂「古代の欠落と民族聖化への道—ファシズム期ルーマニア知識人のとらわれ」

ルーマニアにおける古代ローマ軍団撤退から13世紀の封建国家までの歴史資料の不在と19世紀以降のフォークロア研究を出発点にして、歴史への複雑な観念を抱きながらルーマニア民族の「再生」を望んだ1920年代ルーマニア知識人がとらわれたレジオナル運動というファシズム的なるものの源について考察する。

発表者 4：深澤英隆「表象しえぬ古代の表象—ドイツ・プレファシズム期の視覚文化—」

ナチズムの先行現象と通常考えられているプレファシズムの一現象、ドイツ民族主義宗教運動をとりあげ、その古代的なものとの関わりを探る。その際とりわけ、「神話」的なるものの理解およびその造形表現に着目することとする。

これらの発表を受け、コメンテータの月本昭男は、ナチスに協力的であった旧約学者や、同じ時代の古代オリエンタリズムについて研究を進めている観点から、コメントを述べ、ディスカッションを行う。

最後のディスカッションでは、ファシズム期における古代と宗教、宗教学をめぐる諸問題についてフロアを交えて討議を行う。

本パネルディスカッションは、JSPS 科研費基盤研究 B「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」15H03161 (研究代表者：平藤喜久子) の研究成果です。

## 宗教・障害・共同体—障害と共に生きることの宗教性—

「人間になる」こととしてのスピリチュアリティ  
社会福祉実践現場の現状におけるスピリチュアリティ  
(ラルシュ) 共同体の宗教性—「権利」と「祈り」—  
「社会モデル」の思想と宗教—共生する社会の構築に向けて—

代表者：安藤 泰至  
安藤 泰至 (鳥取大)  
深谷 美枝 (明治学院大)  
寺戸 淳子 (専修大)  
頼尊 恒信 (滋賀県立大)  
コメンテータ：板井 正斉 (皇學館大)  
司会：安藤 泰至 (鳥取大)

日本では、近年における障害者基本法の改正(2011年)、障害者権利条約の批准(2014年)をはじめとして、障害のある人々が社会の一員としての普通の生活を送ることのできる社会に向けての歩みは着実に進んできた。その一方で、昨年の相模原障害者殺傷事件やそれをめぐる言説に見られるようなあからさまな優生思想や障害者排除の動きも顕わになってきている。本パネルでは、そうした現状をふまえながら、広い意味で「障害と共に生きる」こと(単にいわゆる「障害者」との共生という意味ではなく、私たち一人一人が自分の障害や他人の障害と向き合い、そこで「人間として生きる」こと)について、宗教や宗教的な視点というものがどのような意味をもつのかを考えることを目的とする。

障害という問題は、生老病死のそれぞれと密接に絡み合いつつ、人間のもつ有限性についてそのいずれにも包摂されない次元を有しているように思われる。一方で、人権意識の発展や医療技術、情報科学をはじめとする科学技術の進歩は、さまざまな障害がもたらす社会生活上の不利を大きく軽減させ、「障害をもちながらも、それと共により人間的に生きる」ことを可能にしてきた。他方で、出生前診断などの医療技術における「いのちの選別」への志向や、能力主義や効率主義に深く冒された私たちの社会の価値基準は、「(一人の人間としてリスペクトを受ける)人間であること」の閾値を上げ、障害者を排除すると共に、あらゆる人が「生きにくい」世界を現出させつつある。本パネルは、(障害)当事者、宗教者、支援者、研究者といった多様な視点を交えつつ、こうした世界における宗教と障害、共同体の問題に光を当てようとする試みである。

企画者の安藤泰至は、上記のようなパネルの趣旨を確認しつつ、最近刊行された三つの書籍(対象となっているのはそれぞれ認知症、知的障害、精神障害)をとりあげ、それらが「人が人間であること」について同じ視線

と認識を有していることを明らかにする。そしてスピリチュアリティを、私たちが「人間となる」こと、「自己や他者を『人間として』遇する」こととしてとらえ直す可能性について論じる。深谷美枝は、専門職化によって切り離された社会福祉実践とスピリチュアリティの関係が欧米では当事者を深く理解するために再評価されていることを示す。さらに実践においては、厳しさを増す現場の中で実践者自身も障害をもつ人も人間であるための「最後の砦としてのスピリチュアリティ」という側面もあることを、自らのキリスト者としての現場体験と卒業生研究の結果から論じる。寺戸淳子は、(ラルシュ)共同体運動(知的な障害がある人とアシスタントが共に暮らすグループホーム。宗教宗派を超えた祈りの共同体として社会福祉施設との差異化を図っている)の事例を基に、「障害(という状況)」が私たち自身の暴力性を喚起するという認識から、生命の尊重には「権利」とは異なる視座が必要であると説く創設者ジャン・ヴァニエのメッセージと、現場の実践の意義について論じる。最後に頼尊恒信は、障害者権利条約や障害者差別解消法など国際的人権・権利保障の潮流に代表されるインクルーシブ思想と日本の共生思想との関係について究明する。相模原事件を受けて、権利保障の思想だけではなく、インクルーシブ社会の前提としての福祉的土壌の醸成が必要であり、そこに宗教が大きく寄与できることを述べ、宗教的共生の土壌の構築について論じる。

コメンテータの板井正斉はこれまで、高齢者・障害者の伊勢神宮参拝をサポートするボランティア活動から神道と福祉について考察してきた。従来の宗教と福祉研究において最もそのかわりに距離のあった神道の視点から、四人の発表に対するコメントを試みる。パネリスト同士、およびフロアとのやりとりを通して、多面的な議論が展開できよう。

## 井筒「東洋哲学」のパースペクティブと宗教研究

代表者：澤井 義次

池澤 優 (東大)

長岡 徹郎 (京大)

金子 奈央 (中村元東方研究所)

島菌 進 (上智大)

コメンテータ・司会：澤井 義次 (天理大)

応用倫理の領域における井筒「東洋哲学」の可能性  
西谷啓治と井筒俊彦における「意識」に関する比較  
東洋的芸術を通じた井筒俊彦の東洋思想・哲学観  
井筒俊彦の「東洋哲学」観と宗教理解の特質

東洋思想・イスラーム哲学研究の世界的碩学であった井筒俊彦は、晩年、彼独自の「東洋哲学」を構想する中に、主要な宗教思想の古典的テキストを創造的かつ未来志向的に読み解き、彼独自の「東洋哲学」を意味論的に追究したことで知られる。本パネルでは、井筒のそうした「東洋哲学」の視座の特徴を明らかにするとともに、彼のパースペクティブを宗教研究の一つとして捉え、現代の宗教研究において、井筒「東洋哲学」がどのような意義をもっているのかについて検討したい。

まず、池澤優は、井筒の「東洋哲学」を近代からポストモダンへ向かう思想潮流の中に位置づけ、現在における適用可能性を応用倫理の領域（生命倫理と環境倫理）に即して考える。応用倫理における一つの考え方は、存在（人間や自然）に本質的価値があり、そこで守らなければならない尊厳があるとするものである。しかし、その考え方は何を本質的価値と考えるかによって、解消できない対立に陥る危険性がある。池澤は個々の事物に「本質」を認めない「東洋哲学」の構想において、いかなる倫理の構築が可能なのかを考えようとする。

次に長岡徹郎は、井筒の禅や神秘主義などの論考を軸として、西谷啓治と井筒俊彦の「意識」解釈を比較検討する。井筒は深層意識から表層意識が生じる意識の構造を、様々な宗教を比較検討することによって論じた。一方、西谷は西田幾多郎の純粹経験論以来の「直接経験」の発想を受け継ぎ、「もの」があるがままに立ち現れる「場」について考察し、独自の「空の立場」を論じた。「深層意識」と「直接経験」は共通するよう見えながらも、「意識」の解釈によっては異なる立場を示していると思われる。

さらに金子奈央は、東洋的芸術という観点から、井筒「東洋哲学」の性格について考察する。井筒は東洋の思

想・哲学の諸伝統の「共時的構造化」を通して、「西洋哲学」との止揚において「新しい哲学を世界的コンテクストにおいて生み出していく」という構想を抱いていた。金子は、井筒が「禅における内部と外部」や「東アジアの芸術と哲学における色彩の排除」など、東洋の書画や色彩、能などを事例として、東洋の思想・哲学について考察した論考も発表していた点に注目しながら、議論を展開する。

最後に島菌進は、井筒の「東洋哲学」における宗教理解の特質を明らかにしようとする。宗教学者としての井筒は、ライブニッツなどを引き継ぎ、20世紀前半に有力な潮流となる「永遠の哲学」の思想系譜に惹きつけられながらも距離をとろうとしていた。しかし、晩年の井筒は「東洋」という限定を付してではあるが、一元的な究極的真理、あるいは一元的な究極的真理を表す論理構造の提示へと向かった。島菌は井筒のこうした哲学的思惟の展開について、若い求道学徒であった井筒がフランス思想や実存哲学に影響を受けつつ辿った道筋への回帰でもあったと論じる。

以上、4名の研究発表に対して、まず、コメンテータの澤井義次がコメントをおこなう。澤井のコメントに対して、各パネリストが応答することによって、研究発表の内容に関する理解を深めたい。そのうえで、このパネルに参加したすべての研究者も交えて、井筒・東洋哲学をめぐって幅広く討議をおこないたい。このように本パネルは、井筒「東洋哲学」のパースペクティブを宗教研究の一つとして捉えることによって、井筒「東洋哲学」の特質を宗教学の視点から解明するとともに、井筒「東洋哲学」の展開へ向けて、議論を展開しようとする試みの一つである。

## 20世紀ユダヤ哲学再考—政治と宗教のはざままで—

代表者：伊原木大祐

ユダヤ教の倫理的評価の転回—ユダヤ・カント主義を中心に—  
 フランツ・ローゼンツヴァイクのメシアニズム  
 エルンスト・ブロッホとユダヤ性の問い  
 ユダヤ的政治哲学の困難と可能性—レヴィナスの超越論から—

後藤 正英 (佐賀大)

佐藤 貴史 (北海学園大)

伊原木大祐 (北九州市立大)

松葉 類 (京大)

コメンテータ：合田 正人 (明大)

司会：伊原木大祐 (北九州市立大)

「アテネとエルサレムにいったい何の関係があるか？」(テルトゥリアヌス)——この古言は、元来の論争の意図を離れて、今もなお鮮烈な問いを提起している。それは何より、ヘブライの起源を有する「宗教」(エルサレム)とギリシャの起源を有する「哲学」(アテネ)、すなわち信と知、啓示と理性の間にある鋭い対立関係を思い起こさせてくれる。しかも、そのことによって「宗教哲学」という学の存立を試練にかけている。本パネルは、こうした宗教哲学の一類型として「20世紀ユダヤ哲学」を取り上げ、その諸相を考え直す機会としたい。パネル企図の意義は、以下二点に集約される。

(1) 日本の宗教哲学研究においては、ユダヤ哲学の途方もなく豊かな伝統が軽視される傾向にあった。たしかに「ユダヤ哲学」という呼称自体が多義的で、あいまいさを帯びていることは否定できないが、本パネルでは、「ユダヤ教」という中心をめぐって格闘した哲学者たちの思考に取り組むことで、その伝統の一端にわずかなりとも光を当てることを目指す。

(2) 英米圏を中心に「分析宗教哲学」の手法が猛威を振るいつつある今日、宗教哲学における政治的・社会的関心の希薄化はますます避けがたくなっている。ところが、近代以降のユダヤ哲学者たちは、メンデルスゾーンであれ、コーエンであれ、極度に研ぎ澄まされた政治的意識と無縁ではありえなかった。アテネとエルサレムの問いは、ここにおいて政治と宗教の緊張関係という問いに姿を変える。とりわけ20世紀は、同化を被ったヨーロッパのユダヤ知識人にとって、一方で戦争と革命の世紀であると同時に、他方で伝統の再発見の世紀でもあった。そこで本パネルは、20世紀を中心としたユダヤ哲学に焦点を合わせつつ、政治と宗教のはざままで鍛え上げられた思索のモデルケースを提示するつもりである。

第1発表者の後藤は、20世紀のユダヤ哲学が置かれたコンテクストを理解するために、ユダヤ教に対する倫理

的評価の転回の問題を取り上げる。18世紀ドイツのキリスト教社会では、ユダヤ教はその倫理性の欠如が問題視されていた。しかし、20世紀を経た今日、哲学の文脈では、多くの人々はその倫理性の強調ゆえにユダヤ教に魅力を感じている。本発表では特にユダヤ・カント主義の問題に注目しつつ、この大きな転回の意味について考えたい。

第2発表者の佐藤は、フランツ・ローゼンツヴァイクのメシアニズムを扱う。彼の思想のなかでは、救済をひたすら待ち望む「メシア的認識論」と、進歩的な歴史に突発的に亀裂を入れようとする急進的なメシアニズムが共存している。危機の時代に成立したローゼンツヴァイクのメシアニズムは、理性・啓示・政治のあいだで複雑な役割を果たしていたのであり、本発表はその両義的な側面を考察する。

第3発表者の伊原木は、マルクス主義者を自称したユダヤ人哲学者エルンスト・ブロッホの思索を扱う。そのユートピア思想は、レヴィナスやネエルといった思想家からユダヤ的文脈の中で再解釈されてきたが、それ以上に興味深いのがショーレムによる両義的評価である。ショーレムの批評を解釈の出発点としながら、ブロッホのユダヤ教理解がもつ特徴とその背景、そしてそこから帰結するユダヤ性の問題を論じる。

第4発表者の松葉は、エマニュエル・レヴィナスの超越論を分析する。ユダヤ的政治哲学は、ユダヤ教、政治、哲学の三つの分野の境界線上で今日的な困難を抱えている。エマニュエル・レヴィナスはそれらに立ち向かうために、伝統的超越概念に対立させる形で、「低い超越」という具体的・物質的關係を思考した。本発表はこの超越論を通して、レヴィナスのいうユダヤ教普遍主義とその可能性について考える。

最後に、ユリウス・グットマン『ユダヤ哲学』の訳者としても知られる合田が、四人の発表に対するコメントを述べた後、フロアを交えた討論に移る。

## デュルケーム宗教学思想の可能性—没後100年によせて—

「宗教学者」デュルケームの生成  
イタリア宗教史学派はデュルケームをいかに読んだか？  
デュルケームとアメリカ哲学—その距離と接点—

代表者：山崎 亮  
山崎 亮 (島根大)  
江川 純一 (東大)  
堀 雅彦 (北星学園大)  
コメンテータ：竹沢尚一郎 (国立民博)  
司会：山崎 亮 (島根大)

エミール・デュルケーム (1858-1917) 晩年の主著、『宗教生活の基本形態』(1912) (以下『基本形態』と略記) については、山崎によって 2014 年に新しい邦訳が出版されている。これに伴い、従来は、社会学者デュルケームによる宗教社会学ないしは人類学の書としてのみ論じられがちであった『基本形態』が、実は何よりもまず宗教学と哲学の書であった事実が改めて浮き彫りになり、新たな読解・解釈への展望が開けてきている。デュルケームが用いる宗教学 (science des religions) の語には、宗教現象の科学的研究という一般的な含意のみならず、哲学、社会学、宗教学、人類学等、複数の関連する学問領域の交錯のなかで、宗教に関するデュルケームの多様な思想的営為＝宗教学思想が展開するという、独特の構造を見て取ることができる。この点が、『基本形態』を難解にしている一因であるが、反面、それが本書の魅力を形作っていることもたしかである。

本パネルでは、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての近代宗教学生成期に研究の焦点を合わせている 3 名の研究者により、このようなデュルケーム宗教学思想の新たな可能性を探りたい。その際、世紀の変わり目以降、デュルケームが、「歴史」から「哲学」へと軸足を移しながらその宗教学思想を生成させ、それが最終的に『基本形態』へと結実していく過程に着目し、その意義を、イタリア宗教史学からの批判ならびにアメリカ哲学とのアンビバレントな関係を検討することによって、明らかにする。20 世紀前半の宗教史的視角ならびに哲学的視角の一端を参照することで、従来あまり検討されることのなかったデュルケーム宗教学思想の可能性を外在的に考察するのである。この作業はさらに、没後 100 年を一つの画期として、デュルケーム解釈の新たな方向性を切り開くとともに、近代宗教学の生成を考える上でも大きな示唆を与えることになるだろう。

以上の趣旨をふまえて、まず山崎が、20 世紀に入ってからデュルケームの宗教研究の変遷を概観する。彼の宗教研究は当初、諸他の社会制度解明のための手段としての発生論的方法に依拠していたが、やがて「人間科学」の視座から宗教の普遍の本質を問う共時的・構造論的方向へと転換し、同時に認識論的カテゴリーの宗教的起源を探究するなかで、カント的二元論の社会学的解決の試みという構図へと収斂していく。その道行きの解明を通じて「宗教学者」デュルケームの生成に迫る。

次に、江川が、イタリア宗教史学派の祖であるラッファエーレ・ペッタッツォーニ (1883-1959) と、その弟子であるウーゴ・ピアンキ (1922-95) がデュルケームをいかに読んだかについて報告する。ペッタッツォーニは『基本形態』に批判的な書き込みを行い、ピアンキも「宗教的事実」と「社会的事実」の違いという観点から、「社会的事実」の検討のみを行うデュルケームの学問を批判しているが、これらの批判の背後には「歴史」理解の差異があると想定できる。イタリア宗教史学派によるデュルケーム批判をまとめ、「宗教史学」という観点から、デュルケーム「宗教学」に光を当てる。

最後に、堀がウィリアム・ジェイムズ (1842-1910) やチャールズ・サンダース・パース (1839-1914) を中心とするアメリカ哲学とデュルケームの思想との関係について報告する。『基本形態』刊行の翌年、彼は「プラグマティズムと社会学」と題する講義でジェイムズらの立論に厳しい批判を加えている。ところが、そこでの言及が少ないパースの哲学に注目すると、様々な点でデュルケームの議論と符合する点が多いことに気がつく。このようなアメリカ哲学との距離と接点の双方から、デュルケームの哲学的視角の一端を明らかにする。

3 人の発表を承け、竹沢が宗教学・人類学の学問史という観点からコメントを加え、フロアも巻き込んで質疑応答と討論を試みる。



## 日蓮遺文の編纂と刊行

中世における録内御書・録外御書の書写  
 近世における『御書』出版の展開  
 編年体御書目録の編纂について  
 近代における日蓮遺文集編纂に関する一考察

代表者：三輪 是法  
 寺尾 英智 (立正大)  
 堀部 正円 (日蓮正宗教学研鑽所)  
 木村 中一 (身延山大)  
 安中 尚史 (立正大)

コメンテータ・司会：三輪 是法 (身延山大)

鎌倉期を代表する仏教者である日蓮が記したものを総称して「遺文」、また「御書」などと称する。これらは日蓮系諸宗派の教理・教学などの基となるだけでなく、鎌倉期の世情を考える上での基礎資料として、現在日本仏教史研究のみならず、日本史や日本災害史、そして広く海外からも「当時の日本との交渉」を考えるうえで注目を集めている。

日蓮遺文は現在種々の「集成日蓮遺文集」として編纂され世に流布しているが、その淵源を辿れば中世に集成・編纂された『録内御書』・『録外御書』などを挙げることができる。しかし、これらの集成遺文には成立年代やその内容において、多くの疑義が提起されることとなった。

近世に入ると、写本として伝来した日蓮遺文が、刊本として世に流布していく。印刷技術による日蓮遺文の形態の変化は、限定的な地域、人物への伝播から、不特定多数の地域や読者を対象として広範囲へと広まることとなる。当然、中世において提起された「疑義」も未解決のまま多くの読者を得た結果、批判を受けるようになり、その問題は現在においても残されたままとなっている。今回、「日蓮遺文の編纂と刊行」と題し、中世・近世・近代各時代における日蓮遺文の編纂事業に着目して、考察を加えたいと思う。各発表内容は以下の通りである。

1. 寺尾英智 (立正大学)：日蓮遺文は、録内御書、次いで録外御書として集成されたが、特に録内御書は遺文に一定の基準を与えるものとなっていった。録内御書、録外御書が出版されたのは近世のことであり、中世においては専ら書写により伝承されている。録内御書、録外御書の写本研究は、近世刊本との関係に重点が置かれてきたが、本発表では写本の形態から書写の実態を明らかにし、中世写本の特徴について考察したい。
2. 堀部正円 (日蓮正宗教学研鑽所)：日蓮遺文 (御書)

は、近世の出版文化に乗じて多数の出版が確認される。とりわけ、近世初期には3種類の古活字版『録内御書』が出版されており、御書の中でも『録内御書』の重視度がうかがえる。時代の経過にしたがって『録外御書』を含めた御書全般を編年体で整理する方法に転換していった。本発表では、御書の出版を通じて、近世日蓮教団における御書の受容変遷を検討してみたい。

3. 木村中一 (身延山大学)：近世後期、日蓮遺文の新たな編纂形態として編年体御書目録が編纂されるようになる。遺文を編年体で編むという形態は近世にて着目されたものであり、この目録完成により日蓮の思想教学を理解するうえで新たな視点が発見されるようになった。この点は近代以降の日蓮教学に大きな影響を与え、また同時に現在の諸集成遺文編纂にも影響を与えるようになる。このような「編年体御書目録」の諸本を比較検討し、その編纂形態について論究する。
4. 安中尚史 (立正大学)：日蓮遺文集の編纂・刊行に関して、近代になるとそれまでとは異なる考えや手法が執られるようになった。編年体による遺文編纂が江戸時代後期に行われ、その後、明治初期に遺文集として刊行がなされた。さらに時代が経過すると、欧米からもたらされた科学的な手法や技術を用いて遺文集編纂・刊行が行われ、日蓮信仰・日蓮研究に対する近代化が推し進められるようになった。本発表では、幕末からの明治期を中心に日蓮遺文集の編纂から刊行に関わる一端を考察する。

以上の発表を踏まえ、三輪是法 (身延山大学) は、一連の日蓮遺文の編纂事業において、中世以降取り残されてきた諸問題がどのように解決されつつあるのか、あるいは、各時代において、編纂刊行された日蓮遺文が法華信仰・日蓮信仰にどのような影響を及ぼしたのか、というポイントからコメントを加えていきたい。

## 公的領域の多元性を踏まえた宗教の多元性とそれぞれの社会的機能

宗教間対話の諸次元と公的機能

公的領域の諸次元における神道の諸相

宗教多元主義と公的領域

公共宗教としてみたイスラームの普遍性と世俗性

代表者：津城 寛文

武藤 亮飛（新宗連）

菅 浩二（國學院大）

保呂 篤彦（筑波大）

塩尻 和子（東京国際大）

コメンテータ・司会：津城 寛文（筑波大）

### ・パネルの要約と意義

宗教の多元性は事実の記述であり、宗教多元主義は規範の提案である。多元性・多元主義は、宗教・宗派相互の間で考えられることが多いが、それぞれの宗教・宗派の内部にも、一枚岩でない多様性、多元性がある。この内的・外的な多元性が、社会的にどのような機能を果たすか、公的にどのような機能を果たすか、というのが、このパネルの問題意識である。

### ・個々の発表内容

武藤亮飛は、宗教間対話の4類型をふまえ、諸宗教の寄って立つところが、5つの公的領域および私的領域のどこかに比重があって、それが宗教間対話の性格に関係しているのではないかと、それぞれの領域の固有問題はるか、などを論じる。

たとえば、世界平和や反原発などは、世界領域、戦前の三教合同は国家領域、カトリックと生長の家が協力した優生保護法反対や、古都税の運動は市民領域で展開している。霊性交流は、公的領域から引きこもって、ちょうど瞑想やリトリートが裏に引きこもるように、集団とはいえ、私的領域に展開するものと考えられる。

菅浩二は、公的領域における神道の諸相を概観する。神道は「日本」の「歴史」を軸とする、ある範囲の多様な現象の総称とされる。だが見方を改めれば「神道」は、カミ信仰・祭祀・祈り・死者や先祖観等を、近現代社会の私的から公的領域までの射程で連続的に捉え得る視座とならないか。この問題を、津城による宗教の公的機能論と関わらせて検討する。

神道には、国家神道から民俗神道まで、性質の異なるタイプが重層しており、それぞれの固有問題がある。死者、祈り、といった実践がどう位置づけられるかについても、触れる。

保呂篤彦は、宗教多元主義の社会的側面に注目する。宗教多元主義は、さまざまな公的領域で起こっている対立に直面して形成された学説であるが、実際にこの問題にどのように貢献しうるのか、またいかなる宗教多元主義なら有効であると考えられるかを論じる。

宗教的思考や判断が法や政治の思考や判断に影響することの是非や、宗教多元主義的思考の政治における有効性といったことが論じられる際、そこで前提されている世俗性と宗教性のダイコトミーも問い直す。ヒックの理論としての宗教多元主義と、実践としてのAFFORの活動との関係についても触れる。

塩尻和子は、イスラームの普遍性と世俗性を、新たな視点から見直す。一般に政教一致的だといわれるイスラームは、一方では、人間を神格化しないという教義から、厳格な「世俗性」を実現してきた。これまでの常識を反転させて、イスラーム社会の「普遍性と世俗性」の問題を検討する。

イスラームには、普遍的レベルと、スンナ派やシーア派やスーフィーなどの宗派・教団性と、地域的な土着信仰、民間信仰のレベルが、混在していて、それぞれの担い手も、分離したり、1人の担い手が、複数のレベルにかかわっていたりする。その多様性についても触れる。

津城寛文は、公的領域を、世界全体・国家・政治社会・市民社会・民俗社会の5つに区別し、私的領域を含む6つの領域で、諸宗教がそれぞれの順逆の機能を果たすという捉え方を示し、またまた社会的宗教と他界的宗教のかかわりを概説したうえで、各発表にコメントする。

## 総力戦下の宗教系大学・専門学校における「理念」の変質

代表者：江島 尚俊

靖国神社事件以降の上智大学はいかに総力戦体制に対応したか  
護法から国益へ—総力戦体制下における大正大学を中心に—  
総力戦体制下におけるプロテスタント系神学校の変容

ケイト・ワイルドマン・ナカイ(上智大)

三浦 周(大正大)

齋藤 崇徳(大学改革支援・学位授与機構)

コメンテータ：柴田 泰山(大正大)

司会：江島 尚俊(田園調布学園大)

本パネルは、『シリーズ大学と宗教 II 戦時日本の大学と宗教』(2017)に掲載された論稿に基づき昭和前期の宗教系大学・専門学校における「理念」の変質について明らかにしていく。なお、各発表者は以下に示した総力戦体制の特徴を念頭に置きながら報告を行っていく。

体制内のあらゆるものを効率的に動員しようと自身さえも変革せしめる。本パネルでは総力戦体制のことを、「動員を至上目的とした体制」と定義する。この体制下では変革以前から存在したものに對し、強制動員を正当化するための「読み替え」が行われる。ここでの「読み替え」とは、総力戦体制にとって有効かつ有益であるよう、既存の制度や組織、習慣等に新たな意義づけが施される、または、新たな意義を見出していく実践を意味する(江島尚俊「第1章 総力戦体制下における教育・学問・宗教」)。総力戦体制下において宗教系の大学・専門学校がどのように「読み替え」られていったのか。具体的対象として、上智大学・大正大学・キリスト教系専門学校を取り上げながら、それぞれが従来保持していた「理念」(建学の精神や設立意義、教育方針等)が「読み替え」られていった過程や背景を、学内資料・教団内資料から明らかにしていく。

【ナカイ】昭和7(1932)年の上智大学靖国神社非参拝事件は、国家・宗教・教育が衝突した場の1つとして知られる。事件をきっかけとして大学およびカトリック教会は神社参拝を非宗教的行為として受け入れたが、その「読み替え」と合わせて、それ以降上智の指導者はどのように総力戦体制に対応していったのだろうか。本報告では、彼らが情勢を受け入れつつ自己の理念を追求する新しい道を見出していった足跡をたどる。(「第3章 戦時下の上智大学—カトリック系大学はいかに「日本精神」と取り組んだか」)

【三浦】学生(宗門子弟)の資質の変化を〈自由主義的〉とし〈愛宗護法〉の退潮とみなした大正大学では、昭和15(1940)年、綱紀肅正を目的に「本学綱領」を制定す

る。当時の国策(国体明徴・教学刷新)に強い影響を受けながらも、同学にとっては建学の精神を明文化した最初の綱領であった。近世以来の僧侶養成機関を母体として誕生した大正大学は、国家に対し社会に対し自己をどのように位置づけたのだろうか。本報告では、総力戦下で新設された皇道仏教研究所・東亜学科の事例も取り上げながら、大正大学における「理念」の変質を検証する。

(「第8章 「社会」と対峙する仏教学—戦時下における大正大学を中心に」)

【齋藤】本報告では、戦時期における日本基督教団の神学校の検討を通じ、宗教教師養成機関としての神学校が総力戦体制下においてどのように位置づけられていたのかを明らかにする。それまで多数存在していたプロテスタント系の神学校は戦時期に統合されることを通じて、国家体制に直接貢献可能な存在として意味づけられると共に、そこで養成されるべき教師の性格も変化したことを報告していく。(「第10章 戦時下の日本基督教団と神学校の統合」)

なお、コメンテータとして柴田泰山氏を迎えている。本書の位置づけとともに、発表者との質疑応答を行っていただく。

歴史社会学者山ノ内靖によると、総力戦とは近代という時代の破綻ではなかった。それはむしろ近代の必然であり、かつ、現代への通過点として位置づけられることを主張している(山之内靖『総力戦体制』2015)。この主張に立脚すれば、総力戦体制下において生じた変質を明らかにしていくことは、近代および現代をも再考していくことに繋がっていく。曲がりなりに明治期において、教育、学問、宗教は近代的な独立領域として制度的な確立をみた。それらは総力戦体制下において如何なる現実を迎えることとなったのか。本パネルでは3者の報告を通して、近代、そして現代とは何かという大きなテーマへ接続していくことも企図している。

## 多死社会における仏教者の社会的責任

代表者：小川 有閑

超高齢・多死社会に僧侶が求められるもの

小川 有閑 (大正大)

高齢者福祉施設、医療施設における宗教的ケアの現状とニーズ

高瀬 顕功 (大正大)

ケア提供者の宗教観とケア観

問芝 志保 (筑波大)

宗教者と医療者の協働の可能性—医療者の立場から—

岡村 毅 (東京都健康長寿医療センター)

コメンテータ：林田 康順 (大正大)

司会：小川 有閑 (大正大)

超高齢・多死社会を迎える我が国において、とりわけ認知症をもつ人の急増は喫緊の課題である。2013年には460万に達した認知症をもつ人は、右肩上がりに増え続け、高齢化率が40%にいたるとされる2055年には、人口の1割が軽度認知障害以上の症状を抱えると予測される。国は認知症国家戦略(いわゆるオレンジプラン等)を策定し、地域包括ケアを推進することで、この国家的な課題に対処しようとしている。地域包括ケアは多様な社会機能のコミュニティにおける統合であるが、ここに宗教者は想定されているだろうか? また、重度の認知症をもつ人が入所する特別養護老人ホームでは、施設内での看取りや病院に搬送されて亡くなる直前までの介護等、これまで以上に死に直面せざるを得なくなっている。そこには、利用者当事者だけではなく、認知症の進行への不安や長引く介護に疲弊する家族、決して快方に向かうことのない利用者との日々に燃え尽きてしまうスタッフなど、多様な苦悩があふれている。

こうした社会の変化も一つの要因となり、近年では、臨床宗教師や臨床仏教師など、医療や介護の現場で患者の心に寄り添うスピリチュアルケアを主目的とする宗教者(日本型チャプレン)の育成が行われるようになった。これらの宗教者に求められるものは、布教を目的とせず、傾聴を基本とした姿勢であり、自身の信仰を前面に出すことは厳しく抑制される。各大学・機関で講座が開かれ、供給は増えているものの、受け入れる側の医療機関・介護施設のニーズについての正確な把握はまだなされていないと言える。

一方で、お盆などに僧侶を招いて法要を行ったり、定期的に宗教者を招いて講話会を催したりと、宗教色を隠さずに宗教者が高齢者福祉施設で活動をする事例も散見される。得てしてチャプレン的な活動に注目が集まりがちだが、こうした事例の数々は伝統的な宗教行為へのニーズが一定程度ある可能性を示唆している。

本パネルは、上記の現状を踏まえて、高齢者医療・福

祉の現場における宗教的ケア——スピリチュアルケアから伝統的宗教行為まで——のニーズの実態把握・分析を目指す研究グループ(日本学術振興会科学研究費 挑戦的萌芽研究「多死社会における仏教者の責任」、研究代表者:林田康順、課題番号:15K12814)の成果報告である。高齢者福祉施設・医療施設に従事するスタッフに対して行った、ケア観、宗教観、宗教的ケアのニーズ等を尋ねるアンケート調査について、4人が報告する。発表内容は以下ようになる。

小川有閑は、本パネルの問題設定を兼ねて、高齢・多死社会の状況を概観し、仏教者が関わるいくつかの事例やアンケート・インタビュー調査の結果を踏まえながら仏教者が高齢者福祉に寄与する可能性について考察する。

高瀬顕功は、アンケート調査の結果をもとに、高齢者福祉、医療の現場における宗教的ケアの現状とニーズを報告する。その際、ケアの対象を、利用者(患者)本人、家族、スタッフに分けることで、現場の誰に何が求められているのか、より具体的な対象とケアの内容について考察する。

問芝志保は、アンケート調査の結果のなかでもケア提供者の宗教観とケア観の関連性に焦点を当てた分析結果を報告する。ケア提供者の属性(年齢、職種、対人援助職経験年数、見取り経験の有無など)によりケア提供者の宗教観にどのような差異が見られるか、またその宗教観がどのようにケア観に影響しているかを考察する。

岡村毅は、医療の立場から結果の解釈を行い、疾病構造の変化(急性から慢性へ)、人口動態の変化(少子高齢化)、アウトカムの変化(延命から quality of life/death へ)により様々な課題が明らかになりつつある医療現場の現状をふまえて、宗教者と医療者の協働の可能性について考察する。

以上の報告に対して、仏教学を専門としつつ僧侶養成課程に携わり、かつ、生命倫理の研究も手掛ける林田康順がコメントを行う。

## 世俗のなかの「宗教改革」—日米独の Ethical Culture の役割—

代表者：栗田 英彦

日本型政教分離と修養—丁酉倫理会を中心に—

栗田 英彦 (日本学術振興会)

フェリックス・アードラーにおける〈人間性の宗教〉の思想と実践

庄司 一平 (東北大)

19世紀末ドイツの倫理文化主義と民族主義的宗教について

齋藤 正樹 (早大)

コメンテータ：吉永 進一 (舞鶴高専)

司会：栗田 英彦 (日本学術振興会)

16世紀ヨーロッパに始まる宗教改革は、近代の出発点を画定する出来事とされ、その理念は近現代社会における「宗教」のあり方を規定してきた。「政教分離」や「信教の自由」などの近代的理念は、キリスト教の諸教派間の、そしてそれらと国家との軋轢の産物である。また、プロテスタンティズムの理念は、個人の内面的信仰を核とする近代的な「宗教」概念の形成に繋がったことも指摘されている。近代「宗教」概念の成立は、社会の下位領域に宗教を位置づけ、リベラル・デモクラシーを是とする世俗的な市民社会を構造的に支えることになる。

だが、宗教改革運動は、いつもこうした「宗教」のあり方に向かうわけではない。1900年前後に見られる「宗教改革」運動には、むしろ狭義の「宗教」を超えて世俗社会に展開し、共同体の理念や文化的特性の形成に参画しようとするものがあつた。「宗教」概念成立以後のこの種の運動は、時にその概念を放棄して、倫理運動、民族主義運動、政治運動、教育運動、生活改良運動、健康法といった展開を見せる。ホセ・カサノヴァの公共宗教論も宗教の公的領域における役割を論じているが、「世俗／宗教」の二分法を前提とするその議論では、二つのはざままで展開する運動のダイナミズムを適切に捉えることはむずかしい。むしろ、この種の脱宗教的な宗教運動に注目することの意義は、この二分法自体を対象化する可能性にある。規模からいえば、こうした運動は社会全体のなかでは必ずしも大きいものではないかもしれないが、その推進者たちは、人々の倫理的なエネルギーを、「宗教」などの近代的範疇に押し込めるのではなく、社会全体へと解放して、利用するための水路を作ろうとしていた。その試みが成功したかどうかは個別の事例を検討していく必要があるが、その運動のゆくえを探索することで、世俗社会の宗教性とでもいうべきものを、市民宗教論のように静的な形ではなく、動的に考え直すことができるのではないか。

こうした問題意識から、本パネルでは、日本、アメリカ

カ、ドイツにおける「宗教改革」運動と結びついた倫理運動や民族運動を取り上げる。これらの事例は、いずれも Ethical Culture と呼ばれる運動に関連する。だが、類似した運動と関連しながら、三国の運動はそれぞれ異なった展開を見せた。

栗田発表は、初期の丁酉倫理会(1897年に丁酉懇話会として発足)を取り上げ、そこで展開される「人格の修養」の思想と実践について論じる。具体的には、最初期のモデルとしてアメリカおよびドイツの Ethical Culture の運動があつたこと、そして従来対抗的と考えられた井上哲次郎(1856-1944)らの「日本主義」も共通の思想的基盤を有していたこと、さらに身体実践を伴う「修養」が流行する背景に「日本型政教分離」の事情があつたことを指摘する。

庄司発表は、フェリックス・アードラー(1851-1933)による社会改良的及び自己啓発的な宗教運動の思想的展開を跡づけつつ、〈人間性の宗教〉というアメリカにおける宗教類型の可能性について例証する。ユダヤ教改革派の出自、ドイツ留学中の近代的学知との出会い、北東部ユニテリアンとの積極的な交流(自由宗教協会への参加)に触れ、理念としての倫理的宗教の進化論的及び倫理哲学的基礎づけを論じ、Ethical Culture としての実践(組織的展開・「教義不問」と共通の地平・社会改良と啓蒙)を紹介する。

齋藤発表では、19世紀末から20世紀はじめのドイツにおける倫理文化運動ならびに自由精神運動と民族主義運動(völkische Bewegung)を取りあげ、世紀転換期のプロテスタント教会の周縁に位置した人々やキリスト教に基づかない信仰や倫理を主張した人々における民族主義の展開とその特徴を明らかにする。具体的には元ザクセン王国軍将校モーリッツ・フォン・エギディ(1847-1898)と彼の周辺の人々の言説を分析する。

最後に吉永進一からコメントがあり、全体を総括する。

## 近代日韓の宗教運動の「変容」—東アジア的文脈から—

代表者：川瀬 貴也

近代教団と対峙する如来教—如来教機関紙『このたび』から—  
「近代(的)仏教」の語られ方—雑誌『朝鮮仏教』より—  
植民地朝鮮における予言と新宗教—『鄭鑑録』公刊とその意味—  
大本をとり巻くふたつの「モンゴル」—戦前と戦後を比較して—  
聖地とその意義—大韓天理教と天理教韓国教団の比較—

石原 和 (国立民博)  
川瀬 貴也 (京都府立大)  
朴 海仙 (立命館大)  
梶 龍輔 (駒大)  
陳 宗炫 (京都府立大)  
司会：川瀬 貴也 (京都府立大)

本パネルは、近代日韓の様々な宗教運動が「近代化」「近代的学知」「植民地状況」に対峙することによって、その教理や信仰がいかなる「変容」を遂げたかを、「東アジア」の同時代的文脈を重視しつつ、考察することを目的としている。もちろん単に変容させられただけでなく、状況を奇貨として主体的な変容を遂げたという点にも注意せねばならない。各発表の要旨は以下の通りである。

石原発表は、如来教機関紙『このたび』を分析することにより、如来教の近代教団化という課題への応答の一端を覗くものである。『このたび』は、1920年代後半の宗教をめぐる諸問題への如来教の対応の一環として、東京帝国大学宗教学講座の石橋智信を中心に開催された如来教研究会での研鑽を元にした成果を教団内外に発表したものである。ここに掲載された教理研究、教祖研究の成果によって、初めて自らの信仰を自覚した信者も多くいたことに注目する。

川瀬発表は、1920年代半ばから30年代後半まで、植民地朝鮮で発行された『朝鮮仏教』という雑誌の記事を分析することにより、日本仏教と朝鮮仏教がいかなる邂逅を果たし、影響を与えあったか、特に朝鮮仏教は、宗主国の宗教たる日本仏教と対峙することにより、どのような変化を遂げることとなったのかを跡づけることを目的とする。この変化は、植民地的な文脈はもとより、「解放後」の韓国仏教にも影響を与えたことも確認したい。

朴発表は、朝鮮時代の予言書『鄭鑑録』を巡るものである。メシア的存在である「真人」と、彼の登場による朝鮮王朝の崩壊及び地上天国の建設を暗示するこの書は、朝鮮後期においては無論、植民地期に至るまで朝鮮の民衆と新宗教教団に重要な影響力をもたらしたと評されてきた。だが、民間において密かに秘伝されてきたこの禁書を、世間に版本という形態で公開したのは、細井肇という日本人であり、かかる細井の『鄭鑑録』公刊が朝鮮

の民衆と新宗教に新たな状況をもたらしたことについては十分な検討がなされていない。本報告では、以上から細井による1923年の『鄭鑑録』公刊の経緯を明らかにし、その意味を当該期の新宗教と関連して考察することを目的とする。

梶発表では、大本における「モンゴル」とのつながりについて、戦前と戦後における「モンゴル」をめぐる様々な言説との関連性を視野に入れて考察することを目的とする。1924年、出口王仁三郎は理想国家の樹立を目指してモンゴルを目指した。当時の日本では、満州を含めた「満蒙」をめぐる政策が植民地主義的な色合いを強めつつ重要視されたほか、民間では特に満州を樂園のように表現する理想主義が流行した。やがて戦後になると、一部の学者やメディアによって「モンゴル」は戦前と異なる観点から再び持ち上げられ、大本はモンゴルに拠点施設を設置してつながりを持つようになる。本発表では、大本・王仁三郎の宗教理念や実践が、日本社会における「モンゴル」(蒙古、満蒙)をめぐる言説空間の状況とどう関連しているのかを、戦前と戦後を比較して検討したい。

陳発表は、聖地をめぐる信仰の変容について、日韓併合期と独立後の韓国における天理教信者の信仰生活から考察することを目的とする。天理教は1838年に日本で始まり、1893年から韓国布教が行われた。天理教の信仰において、聖地とされる「ちば」は重要な意味を持っており、ちばを媒介して救済が行われるとされる。日韓併合期の朝鮮人信者はちばを媒介とする信仰を標榜した。しかし、第二次世界大戦後から日韓国交正常化が締結される1965年まで、日韓の国交が断絶されたことに影響され、韓国の天理教信者はちばを訪れることができなくなった。本発表では、こうした社会変動が信仰生活にいかなる変化をもたらしたかについて検討したい。

## 学校教育における伝統的な言語文化としての神話教材

帝国日本の教科書にみる天皇神話  
 神話教材を用いた国語科教育の現状と課題  
 日本の学校教育における伝統的な言語文化教育—過去と現在—  
 神話教材の課題と展望

代表者：大澤千恵子  
 石井 正己（東京学芸大）  
 大澤千恵子（東京学芸大）  
 松村 一男（和光大）  
 藤井 健志（東京学芸大）  
 司会：大澤千恵子（東京学芸大）

平成20年度に改訂された現行の学習指導要領より、小学校の第1、2学年において、神話・昔話を伝統的な言語文化として位置付けた国語科教育が行われることになった。学習内容に直接的に反映されるのは、改定を受けた後に新たな教科書が出版されてからとなる。改訂直後の平成23年度の教科書では、教育実践の蓄積がないこともあり、新学習指導要領の目玉ともいえる新たな試みに対して、いずれの教科書会社も意欲的に取り組んでいたことが見て取れた。各社がしのぎを削るように著名な児童文学者や文学者の再話を採用していたり、学習内容にも様々な工夫が凝らされたりして独自の特徴を出していたのである。ところが、その後の平成27年度版では、各社ともに読み聞かせを中心としたむかしのお話に親しむ態度を育てるといった比較的緩やかな学習内容となっている。

このことは、戦前の教育において神話の取り扱いに問題があったことを踏まえて、戦後教育から排除された日本神話がいきなり教材化されたことに対する教育現場の困惑を物語っているといっても過言ではない。実際、学校現場における神話教材に関する調査を行う中でも、まず教師自身が神話についての知識が乏しいことに対する不安感をもっていたり、宗教的に意味合いを持つ神話を教材として扱うことに対する違和感があったりすることがわかった。そうしたことが要因となって、独自の理念に基づいた教育方針を持つ私立学校では全く扱われていなかったり、公立学校においても日本神話を伝統的な言語文化の教材として積極的に用いたりする授業はほとんどみられなかった。神話に縁の深い山陰地方における調査でも、結果に大きな差異は見られなかった。このような現状の中で、注目に値するのは、学芸大学附属小学校における神話教材を用いた国語科教育である。学校司書と連携し、新しい学習内容として神話教材を積極的に用いた実践活動を行っており、子どもたちも楽しみながら

神話を学んでいる様子がみられた。そこに、神話教材を用いた今後の教育実践の可能性をみることができる。

本パネルでは、学校教育における神話教材を用いた教育の課題点と現状を踏まえ、これからの神話教育が進むべき方向を考えるために、教育研究、神話学、宗教社会学の観点からその課題と展望について多角的な考察を行う。さらに学校現場の現状と教育実践について、各分野の専門的な知識を生かした視点に照らし合わせて考察することを通して、教育界の求めに応じた提言を行うとともに、新学習指導要領となった数年後にも対応的できる理論の構築を目指すものである。具体的な内容は以下のとおりである。

まず、日本文学研究、国語教育の立場から石井正己が、帝国日本が編纂した国定国語教科書や植民地・移民地の国語・日本語教科書を通して、神格化されてゆく天皇を神話や行事化から分析することで、戦前の教育における神話教材の扱いの問題点を指摘する。次に、神話教材を用いた伝統的な言語文化教育の現状の調査結果の詳細と系統的な学習の可能性を模索するために行った実践の報告を国語科教育研究の立場から大澤千恵子が行う。その実践報告を受けて、専門的な神話の知識を持つ比較神話学の立場から松村一男は、伝統的な言語文化が初等教育の中だけで用いられている現状を踏まえ、教育全般の中で議論されるべき課題としての今後の展開の可能性を検討する。

最後に、宗教社会学の立場から藤井健志が、学校教育現場における伝統的な言語文化の解釈の妥当性を検証するとともに、教科書作成や、その使われ方について提言を行う。これらは、日本学術振興会の科学研究費助成事業における基盤研究(C)に採択された「学校教育における神話教材整備のための予備調査」の2年次の研究活動として位置付けられる。

## 国体明徴運動下の社会と宗教—昭和10年前後を中心に—

谷口雅春における天皇と日本—昭和10年前後の言説—  
「国体明徴」と神社界・宗教界  
昭和前期の宗教者における日系移民と国家帰属  
昭和戦前・戦時期における「聖地」ツーリズム  
昭和10年前後の消防と国体

代表者：小島 伸之  
寺田 喜朗（大正大）  
藤田 大誠（國學院大）  
高橋 典史（東洋大）  
平山 昇（九州産業大）  
小島 伸之（上越教育大）  
司会：小島 伸之（上越教育大）

本パネルは、近代日本の宗教とナショナリズムをめぐる「知」の諸相の具体的な一側面として、国体明徴運動下、昭和10年(1935)前後における日本社会と宗教をめぐる諸事例について具体的に分析することを目的とする。

昭和10年(1935)は、すでに大正期から問題とされてきた「天皇機関説」が、野党・軍部・右翼団体を中心とした「国体明徴運動」の展開によって、その代表的論者であった憲法学者美濃部達吉への直接的排撃となり、最終的な政治的局面としては10月の岡田啓介内閣の第二次国体明徴声明により、「天皇機関説」が「国体に悖る」ものとして否定され、「芟除」されることになった年である。

「天皇機関説事件」や「国体明徴声明」の影響については、その「学問」の在り方や姿勢のみならず、同年の教学刷新評議会の設置、翌昭和11年の二・二六事件、同12年の『国体の本義』刊行など、法制史的観点や政治史的観点、思想史的観点、教育史的観点からは盛んに論じられて来たが、それに比べ、宗教史的観点や社会史的観点からの検討はさほどあるわけではない。とりわけ、それまでも行われてきた神道的或いは宗教的な「国体論」やそれに関連する諸運動、さらには一般社会の受け止め方、そして天皇観などが、この年を契機としてどのように変化したのか、或いはしなかったのか、という点は必ずしも詳しくは明らかにされていないといえる。

そこで、こうした昭和10年前後における政治的・社会的状況の下、宗教活動、信仰生活を含むさまざまな社会生活の局面において、国体明徴運動的言説がどのような影響を与え／また与えず、「国体」に関する言説・運動はどのように展開されていたのか。またそれらの諸事例にみられる共通性と異質性はどのようなものであるのか。本パネルは、こうした問題意識に基づき、「天皇機関説事件」が起こった昭和10年(1935)という年をメルクマールとしてその前後の時期に着目するとともに、宗教運動、社会運動、観光、移民などをめぐる諸領域の中から具体

的な事例を取り上げることにより、「国体明徴」が大きな社会的課題となっていた昭和戦前期における日本社会と宗教の状況について、比較の視点から実証的に明らかにすることを試みるものである。

本パネルでは、下記の5つの発表をもとに討議を行いたいと考えている。

寺田喜朗「谷口雅春における天皇と日本—昭和10年前後の言説—」は、谷口雅春が第二次大本事件(1935)の前後において、日本ならびに天皇に対する発言を増やしていく状況を検討する。

藤田大誠「『国体明徴』と神社界・宗教界」は、昭和10年前後における神社界・宗教界の動向とその担い手たちによる「国体」「皇道」「日本精神」に関わる言説を取り上げ、その社会史的意義を検討する。

高橋典史「昭和前期の宗教者における日系移民と国家帰属」は、いわゆる排日移民法の以降の、在米日系移民二世たちへ教化・教育活動を積極的に行っていた宗教関係者たちの言説を検討する。

平山昇「昭和戦前・戦時期における「聖地」ツーリズム」は、知識人の「国体」言説の広まりとは別の、「聖地」参拝(巡拝)ツーリズムという「国体」をめぐる「体験」の広まりについて検討する。

小島伸之「昭和10年前後の消防と国体」は、昭和12年(1937)防空法設立以前の消防組、防護団等の消防団体における、国家や悖るに関する言説の在り方について検討する。

以上の各発表及び質疑を通じて、昭和10年前後の社会における「国体」に関する言説・運動を複眼的に考察することを試みる。なお、本テーマセッションは、科学研究費補助金(基盤研究(C))「国家神道と国体論に関する学際的研究—宗教とナショナリズムをめぐる「知」の再検討—」(研究課題番号:15K02060、研究代表者:藤田大誠)の研究成果発信の一環として行われるものである。



## 戦後日本の宗教者平和運動研究を更新する

戦後日本の宗教者平和運動と東アジアの関わり  
 戦後日本の仏教界と靖国神社問題  
 戦後日本におけるキリスト教平和運動の変遷  
 戦後日本の新宗教平和運動における思想と実践

代表者：大谷 栄一  
 大谷 栄一（佛教大）  
 近藤俊太郎（本願寺史料研究所）  
 川口 葉子（文化庁）  
 塚田 穂高（日本学術振興会）  
 コメンテータ：對馬 路人（関西学院大）  
 司会：大谷 栄一（佛教大）

### （1）本パネルの位置づけ

本パネルは、2016年4月より実施している共同研究「戦後日本の宗教者平和運動のトランスナショナル・ヒストリー研究」（代表者：大谷、科学研究費補助金・基盤研究(B)、2016～18年度）の中間報告というべき位置づけを持つ（メンバー全10名のうち、今回は4名が発表を行う）。

本共同研究の目的は、第二次世界大戦後の日本の宗教者による平和運動（宗教者平和運動）の歴史をトランスナショナルな視点から実証的に解明することである。現在、一次資料を探索・整理するとともに、資料調査、インタビュー調査、現地調査等によって調査・研究を進めている。

### （2）本パネルの目的

本パネルの目的は、「戦後日本の宗教者平和運動研究」のこれまでを振り返り、本研究領域の進展のために新たな問題提起を行うことである。当該研究領域の先行研究は皆無ではないが、研究の蓄積はまだ薄い。決して多くない先行研究では仏教界、キリスト教界、新宗教界など、宗教界ごとの研究が多く、トランスナショナルな視点に欠けていた。今回のパネルでは、広く宗教界全体の平和運動の動向を描き出すとともに、アジアとの関係という視点も加味して、当該研究領域の更新を図りたい。

### （3）発表者の報告概要

4名の発表者の報告概要は、以下の通りである。

大谷報告：戦後日本の宗教者平和運動は戦後東アジアが直面した諸課題と関連し、その地政学的な状況に対応しながら展開した。本報告では、戦後日本の宗教者平和運動がどのように発生し、展開したのかを、東アジアとの関係に注目して考察する。平和運動を担った仏教徒たちのアジアへのまなざしや実際の活動、東アジアの仏教徒との関係などを分析することで、トランスナショナルな視点から、戦後日本の宗教者平和運動を捉え返すための問題提起を行う予定である。

近藤報告：戦後日本の仏教界にとって共通の政治・宗

教的課題となったのが、靖国神社問題であった。この問題に反対の論陣を張った仏教界のなかでは、真宗者の活動が目立つ。仏教徒にとってこの問題は、直接的には自民党によって提示された法案への反対であったが、同時に、戦前の仏教による戦争協力の歴史に対する反省や、あるべき国家と宗教との関係を模索する営みでもあった。本報告では、『中外日報』紙における靖国神社国家護持をめぐる論争を取り上げ、真宗の動向に注目しながら、仏教徒の信仰実践について考えてみたい。

川口報告：戦後キリスト教の平和運動は、各教団において活動がなされた一方、教団・教派の枠を超えた団体がそれぞれの特色のもと活動してきた。本報告で主な対象とするのは、キリスト者平和の会、日本友和会、キリスト者遺族の会といった、教団・教派の枠を超え、政治的立場の一致によって集まった諸団体である。教団から傍流化されたそれらの団体は、1950年代に戦争に対する立場、信仰的立場による脱落を経験したのち、1960年代に政治的主張を共有する団体として確立してきた。それらの運動を通して、戦後キリスト教における平和運動の変遷と広がりの様相を報告する。

塚田報告：戦後日本の新宗教は、その運動の活力を基盤に平和運動にも積極的にかつ広く関わってきた。よってそれへの注目も、創価学会や立正佼成会のような大教団や、新日本宗教団体連合会（新宗連）、世界宗教者平和会議（WCRP）のような連合的な動きに集まる傾向があった。本報告では、新宗連やWCRPにも早くから関わつつ、中小規模ながら独自の平和運動を展開してきた松緑神道大和山とその初代教主・田澤康三郎の思想と実践に焦点を当て、戦後日本の新宗教平和運動の多様性とその位置づけを示す。

なお、コメンテータは、日本の新宗教研究を牽引してきた研究者の一人であり、近現代日本宗教史に精通している對馬路人氏に依頼した。当日は、フロアも交え、活発な議論が行われることを期待したい。

## 関与型研究の可能性と課題

代表者：弓山 達也

仏像制作ワークショップにおける「宗教性」  
文化政策における地域資源の「活用」をめぐって  
グリーンケアとしての儀礼—被災地における念仏講と観音巡礼—  
スピリチュアルケアにおける宗教性—自らの死生観の探求から—

君島 彩子 (総合研究大学院大)

河東 仁 (立教大)

吉水 岳彦 (大正大)

山本佳世子 (天理医療大)

コメンテータ・司会：弓山 達也 (東京工業大)

2011年の東日本大震災以降、宗教研究者が宗教者や行政やNPOや地域関係者などと協働しつつ、現場に従事し、こうした関与から調査を積み重ねる「関与型研究」が広がっている。これは被災地だけではなく、宗教が福祉・医療・看護・街づくり等と重なる現場、例えば貧困支援やスピリチュアルケアや地域活性化でも見ることができる。こうした動向は1995年のオウム真理教による地下鉄サリン事件以降、主流となった対象へのデタッチメントからの大きな逸脱なのだろうか。それとも宗教研究の新たな方法論的革新なのだろうか。

このパネルでは、かかる問題意識のもと、関与型研究の可能性と課題を吟味するものである。むろん調査対象に関わりつつ研究を進める手法は、アクションリサーチとして、教育・看護・福祉といったヒューマンケアの分野で用いられることが多い。従って宗教研究がこうした分野にまたがる時、アクションリサーチ的な手法をとることは自然なことともいえる。宗教研究者が(時に信仰に基づく)実践とともに、それ自身を調査対象にすることは、臨床家が自らの実践を研究することと大きな違いはないのかもしれない。

しかし同時に科学的な宗教学は、その学としての自立性を、神学・宗学といった規範的学問からいかに身を離すかによって獲得してきた。また信仰者の価値観に安易に踏み込まない原則が、一方で実証的研究の洗練を、他方で対象への敬意を育んできたとも考えられよう。その意味で関与型研究は、その方法・立場・思想への絶えざる洞察や自己批判なしには、緊張感の喪失と対象への尊大な無理解を生みかねない。そのため、このパネルでは、調査対象との関わりの中から自らの研究を模索する、研究者でもあり、実践家でもあるパネリストの報告を受け、関与型研究とは何か、そしてその可能性と課題を吟味す

るものである。以下がその報告の概略である。

近現代の仏像研究者でアーティストの君島彩子は、宗教者と共に粘土を用いて仏像を制作するワークショップを行なってきた。本発表では、都内の生涯教育施設や岩手県大船渡市の仮設住宅での実践をもとに、仏像の宗教的位置づけ、地域社会における仏教文化学習、参加者のワークショップにおける信仰について検討を行う。

宗教心理学者であり、震災後のコミュニティ再編の現場に通い続けている河東仁は、文化資源の活用をめぐる功罪について、自らが試みた実践例を交えて論ずる。

浄土教研究者であり、僧侶の吉水岳彦は、東日本大震災被災地支援の中から、東北の地に伝承された仏教儀礼、特に観音巡礼や念佛講の伝統に、日本的なグリーンワークの性格を看取り、現在、その伝統の保存や再興を手伝いながら、あらためて苦の臨床における伝統的仏教儀礼の現代的意義や応用を考えている。

死生学の研究者であり、スピリチュアルケアの実践と人材養成に携わる山本佳世子は、日本でスピリチュアルケアの理論的・実践的指導者の殆どが宗教者である一方で、ケアを学ぶ者やケア対象者の殆どは自身と同様に特定の信仰を持たないことから、日本的なスピリチュアルケアの在り様を「非宗教者」という視点から検討する。

なお宗教社会学者で学生の被災地学習をサポートする弓山達也は、司会者として問題提起とコメントを行い、議論を整理し、またフロアを交えての豊かで前向きな意見交換の場を作りたいと考えている。なお、このパネルは科研費「復興期における震災文化の研究—宗教研究からのアプローチと実践—」の成果の一部である。

## 政教関係の国際比較と新しい公共宗教論をめざして

政教関係の国際比較と公共宗教論の視点

モンゴルにおける政教関係と越境する宗教的公共活動

マイダン革命とウクライナ諸教会の社会貢献活動

台湾のキリスト教徒による靖国参拝と独立運動

「宗教と和諧」政策に見る中国の公共宗教論

代表者：櫻井 義秀

櫻井 義秀 (北大)

滝澤 克彦 (長崎大)

高橋沙奈美 (北大)

藤野 陽平 (北大)

川田 進 (大阪工業大)

司会：櫻井 義秀 (北大)

宗教と公共性、宗教の社会参加をめぐる議論が、1980年代以降世俗化論に代わる宗教論として欧米で論議され、日本でも触発されて研究がなされてきた。ホセ・カサノヴァは旧著の公共宗教論ではカトリックのモデルが強すぎたこと、グローバルな視点から再編する必要性を2015年の日本宗教学会学術大会シンポジウム(2015年9月4日 於創価大学)でも主張した。コメンテータを務めた櫻井は、宗教の公共性が規範論ではなく社会過程論から考察されることと、宗教の公共的役割は宗教の政治参加と社会支援事業の二側面から研究され、ポスト福祉国家における福祉の多元化に対応することを確認した。

本パネルは、櫻井義秀が代表の基盤研究(B)課題番号16H05712「アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究」(平成28-30年)の中間報告的内容をなす。本科研では、従来の西欧/キリスト教型公共宗教論を相対化するべく、アジア発信の新たな公共宗教論の構築を目指す。具体的に、東アジア・東南アジア・南アジア、およびロシア・モンゴルにおいて、(1)歴史的な政教関係の構築、(2)グローバル化によるトランスナショナルな宗教運動の影響、(3)急激な近現代化と社会問題が生み出す人々の宗教文化への渴望の3点に着目した事例研究を重ね、現代宗教が公共圏に参画する形態を比較社会的に分析しようとするものである。

この度の発表では、東アジア(日本・中国・台湾)に加えてポスト・ソーシャルリズム国家における政教関係を展望するべくロシアとモンゴルの発表を行う。発表者は5名であり、以下に発表の要旨を掲載する。

①櫻井義秀 パネルの趣旨説明として、上記のような研究状況の概略を述べ、櫻井の東アジア・東南アジア地域における調査研究をふまえて、政教関係を比較する視点を提示する。その際、日本における公共宗教論一理論的な議論よりもアクチュアルな議論を紹介しながら、現場

から政教関係や公共宗教を考察する。

②滝澤克彦 モンゴル国において、社会主義体制崩壊後の社会変化のなかで展開してきた政教関係と諸宗教団体による公共活動の特徴を指摘し、そこから導かれる公共宗教論の可能性について論じる。特に、「伝統的宗教」として半国教的な地位にある仏教と、民主化後に広まったキリスト教を対比しながら、その両者において重要な役割を果たす国際的なネットワークの分析を通して、国民国家の枠組みを越えた公共宗教論の視座を検討する。

③高橋沙奈美 2013年11月から2014年3月にかけてのマイダン革命は、人間中心的価値観への転換を求める闘いでもあった。ウクライナの諸教会ではマイダン革命の精神を受け継いだ社会活動が活発に展開されている。モスクワ総主教系とキエフ総主教系のウクライナ正教会および、ギリシア・カトリック教会の司祭・神父たちへの聞き取り調査をもとに、マイダン革命後の彼らの社会活動の変化について考察する。

④藤野陽平 台湾は現在も天皇の領土であると主張する広い意味の独立運動に位置づけられるグループが存在する。この団体は毎年天皇誕生日に合わせて数百人で来日し、皇居と靖国神社を訪問する。この団体の設立当初には、台湾独立運動に共感する多くのキリスト教徒も参加したのだが、彼ら・彼女らのキリスト教信仰と靖国参拝という実践との間の関係性を、戦後台湾社会の文脈上の「日本」が持つ意味を世代間の比較を通じて考察する。

⑤川田進 地域研究の立場から、中国共産党の宗教政策の推移の中に公共宗教論を位置付ける。対象時期はプロレタリア文化大革命終結後、1978年鄧小平政権から現在の習近平政権まで。その中で核となるのは、2007年共産党大会で確認された「宗教と和諧」政策である。イスラームと仏教の事例を紹介する。

2017年7月3日発行

編集・発行 日本宗教学会 第76回学術大会実行委員会

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学文学部宗教学研究室内

E-mail : [jars76th@gmail.com](mailto:jars76th@gmail.com)

HP : [http://jpars.org/annual\\_conference/](http://jpars.org/annual_conference/)